

高等教育に求められる学習評価に関する一考察

Consideration of Learning Assessment for Higher Education

金 岡 敬 子

Keiko KANAOKA

キーワード：中教審、能動的学修、パフォーマンス評価、学習評価、ルーブリック

1. はじめに

近年、大学教育において「能動的学修 (Active Learning)」の推進が重要課題となりさまざまな取り組みがなされている。中央教育審議会2008年の「学士課程教育の構築に向けて (答申)」では、学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れ方針の三つが明確にされ、学位を与える課程を中心に、学士課程教育を構築するための方策が示された。さらに、2012年には「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」がまとめられ、各大学の改革に向けた方策を実行するための具体的な手立てについて示された。

その課題解決策として、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を待った人材は、学生から見て受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修への転換が必要である」と、能動的学修の重要性が主張されている (中央教育審議会, 2012, p.9)。

本稿では、以上のような大学教育環境の変化を受けて、能動的学修の結果として求められている新しい評価方法についての検討を行う。特に、学習成果アセスメント (assessment) ツールの評価方法として活用されるルーブリックの作成方法について注目し、その基本的な理解と活用方法のメリットについて確認をし、ルーブリックを今後どのように担当する授業の中で活用することができるかの方向性について検討することを研究目的としている。

2. 新しい教育評価に求められるもの

2-1 教育評価と学習成果の方向性

現在、大学の教育のありかた、とりわけ授業方法を巡っては、各大学においてさまざまな授業方法により、授業改善が進んでいる。その教育の取り組みを分類し一覧にすると表1のようになる。

表 1 教育の取り組みの分類

①	教育課程の体系化に関する取組	初年次教育・リメディアル教育・キャリア教育関連授業・カリキュラムの体系化の工夫・高大連携等
②	教育方法の改善に関する取組	ジェネリックスキルの育成・PBL・アクティブラーニング・インターンシップ・反転授業、ICT等
③	教育力・指導力の向上に関する取組	TA・SAの活用、ピア・サポート、オフィスアワー、ラーニング・コモンスの整備活用、FD/SD研修、業績評価・授業評価等
④	成績評価基準の明確化	GPA、キャップ制、コンピテンシー評価等
⑤	学修成果の把握	学修ポートフォリオ、学生の学修時間、IRを活用した改善活動

出所：文部科学省著（2014）p.260をもとに筆者作成

高等教育の現場では、教育課程の体系化、教育方法に関する改善、教育力・指導力の向上などのさまざまな授業改善がなされており、各大学が実施している詳細も可視化され、情報を得ることも可能である。その取り組みの成果とともに、その結果を評価するための取り組みが必要で、どのような評価方法が求められているのかも重要な課題である。また、評価をするにあたり、どのような評価方法がより公正で公平な評価につながるかを考慮しつつ評価をすることも大切となる。

特に、教育改善に向けた取り組みの結果は、これまでのペーパーテストをもとにした評価方法だけでは測ることができないため、高次の能力評価を行う必要が求められている。このため、授業終了時に行う評価だけでは、学生の真の評価をすることは難しい。目標達成に向けて実施した内容は、授業の途中においても方向性を示しながら、学生の成長を促すために必要な評価の方法が求められている。

田中（2008）は、「教育評価」にさまざまな角度から光を当て、まずはその正体を明らかにするとともに、「教育評価」を教育の改善に役立たせる道を探ることが重要であると述べている。

評価方法としては、教員あるいは学生と教員の双方向、あるいは学生同士で評価をし合うなどの方法も取り入れることが求められており、またその評価結果についての可視化も近年急速に進んでいる。

学生の学習成果（learning outcomes）については、「具体的で、一定の期間内で達成可能で、測定や評価が可能」（中央教育審議会, 2008）なものであり、「特に、成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト（学習到達度調査）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする」（中央教育審議会, 2012）と具体的な表現で示されており、学習成果についての具体的な評価をすることが求められている。

山田（2013b）は、教育評価を多角的な視点から、多様な評価方法によって評価するうえで、学習成果アセスメントツールを図1のように分類している（p.33）。

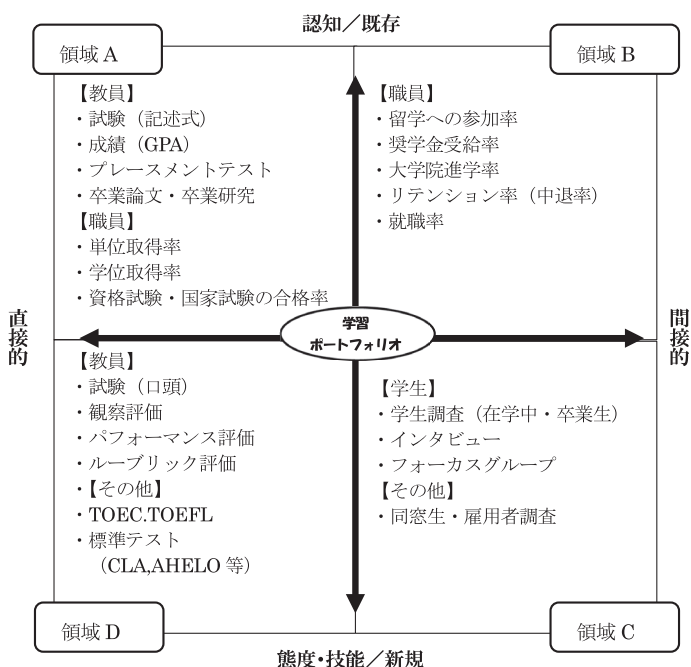


図1 学習ポートフォリオ

出所：山田（2013b）

山田は、学生の学習成果を多面的・実証的に測定するためには、4領域全体にまたがるツールとして学習ポートフォリオがあり、図1に示した各領域から必要なツールを選択し、それらを組み込むことで、学習成果の全体像を把握することができるとしている。このため、その全体像を確認したうえでどのような評価方法が適当かを決定することにより、学習成果を多面的・実証的に測定をしていくことができる。

2-2 評価方法

評価方法には、評価をする対象によって多様な評価方法があり、どのような評価方法を用いるかは、評価の機能やタイミングを考えながら行わなければならない。

例えば、以下のように具体的な情報の中から計画的に評価を行う必要がある。

- いつ（When） → 15回の授業の途中と終了時に
- 誰が（Who） → 教員が、あるいは教員と学生、または学生相互に
- 何を（What） → パフォーマンスを
- 何のために（What） → テストだけでは測ることができない実際の場面の高次の能力を評価するために
- どのように（How） → ポートフォリオ・ルーブリック等の活用によって

新しい評価方法では、ペーパーテストだけでは測れない高次の能力を評価することになるため、その評価方法は、客観的で信頼性があり、さらに公正に評価されるものでなくてはならない。その客観性・信頼性・公平性がある評価となる真正の評価（authentic assessment）¹⁾には、パフォーマンス評価（performance assessment）²⁾、ポートフォリオ（portfolio）³⁾評価、ルーブリック（rubric）評価（評価基準として用いられる）などの評価方法を取り入れて評価することになる。

なぜ、新しい評価方法でなくてはならないかについてGipps（2001）は、「新しい評価方法の登場や評価の目的の多様性は、従来の精神測定学を基礎とした測定中心の評価方法では、もはや時代の要請に答えられないことを意味している。それゆえにこそ、パラダイムの転換が求められているのである」と述べている（邦訳p.1）。

学習成果を新しい評価方法で行うためには、教師による学生の学習到達度の把握や測定を具体的にすることが重要であるが、その結果に対する透明性も欠かせない。なぜなら、学生が主体的に学修した結果を、対社会に向けて信頼性確保のために発信することも必要であり、さらに質保証の観点からも重要だからである。

しかし、一方では大学教育における評価方法の難しさという観点から、東山（1999）は、「大学の事情や教員の分野の差異はあるが、教育活動の評価を「どのような活動（範囲）を何のために（目的）、どのように（方法）評価し、その結果をどう使うか（還元）」が最初に議論されるべきであろう。…中略… 現場の教員からの議論なしに「学生による授業評価」「教育業績評価法」といった方法論が一人歩きしている感が強い。そのために多くの教員が戸惑いと不安、不満を持っている感じがする」と述べている（pp.195-196）。

さらには、「評価を実施するには、評価基準の策定、評価項目と対象事項、評価方法と評価組織、評価結果の有効還元、結果の公表度合いと利用限界、評価制度の透明性」がきちんと確保されることも教育活動の活性化には必要であるとも述べている（p.197）。

2-3 学習成果による質の保証

大学教育の質の保証は、これまでの日本の大学における「入難出易」の時代が長く続いたことにより、その真の評価が難しいことから重要視されている。そのため状況改善が求められて

-
- 1) 真正の評価とは、現実世界（real-life）における課題や状況での学生のパフォーマンスを映し出し、かつ、測定するような評価。例えば、学生が作文でうまく伝達することを望むのであれば、それを評価する真正な方法は、学生の作文の現物を評価する（Hart, 2012, 邦訳p.144）。
 - 2) パフォーマンス評価とは、学生の学習の達成状況を評価する場合、求める技能や能力を実際に用いることができるかを評価しようとするものをいう（評価対象は課題）（Gipps, 2001, 邦訳p.246）。
 - 3) ポートフォリオとは、元々は書類を入れる紙挟みや、ファイルのことをいう。評価の用語としてのポートフォリオは、ファイルに学生が学習活動の中で示した学習成果を示す事例や作品を入れて保存することである。評価といえば、点数や順位という考え方が従来の評価の中心であったが、ポートフォリオの場合は、ファイルに事例や作品を入れることが評価となる。つまり、ファイルに入れて保存することで、その保存したものの価値を認めることになる（評価対象は資料）（Gipps, 2001, 邦訳p.245）。

おり、国によって行われるべき支援は、「徹底した出口管理、成績の厳格化」を実施している大学への支援である。

山田（2013a）は、社会からの信頼に応えるため、新しい学習評価の取り組みや改善を実行するには、計画・実践・評価・改善（PDCA）のサイクルを確立することが重要で、それが教育の質の保証に繋がるとの見解を示している（図2）。

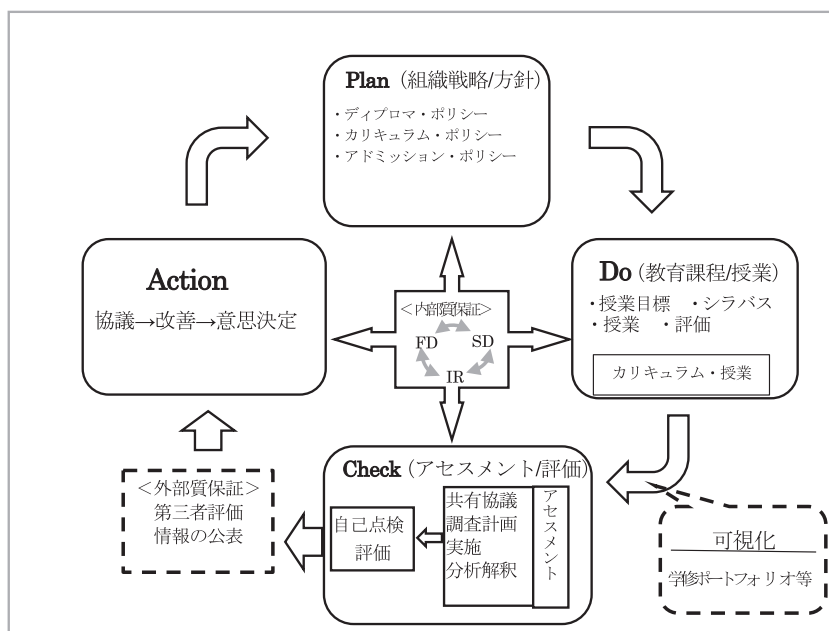


図2 教育の質保証システム（イメージ）

出所：山田（2013a）の図をもとに筆者一部修正

さらに山田は、「各機関が自らの教育の質を保証するためには、恒常的な大学運営の質のシステム（PDCAサイクル）が不可欠である」とも述べている（p.32）。

2-4 評価の観点

学生の質の保証をするための評価方法の原理（評価を評価する観点）には、①妥当性（validity）②信頼性（reliability）③公正性（equity）④実行可能性（feasibility）の4つの観点から評価を行う必要があるといわれている（杉谷, 2015）。学生の学力に見合った評価方法であり、測りたい能力を適切に評価しているのかどうか、さらにその評価方法を誰が行っても同じ結果が出る評価であることが必要である。さらに採点をする際には、評価方法に一貫性がある評価であることも重要なことである。

また、評価が公表されたとしても社会的に認められる評価でなくてはならない。そのような評価をするための評価方法として、ルーブリック評価が近年注目されている。

3. ルーブリックによる評価

3-1 ルーブリックの必要性

新しい評価方法、特にルーブリック評価を使用することは、多様な学生の評価に対して公正で公平な評価を行うために大変有効である。さらに、一度評価方法を確立すれば、年度をまたいで次の年にも同じ評価基準で評価することができ、それに基づいて指導をすることができるため、学生への評価の可視化にも繋がる可能性が高い。特に複数の担当教員による運営の授業では、評価にばらつきが出ない評価方法として有効である。

ある科目で複数の教員が担当する場合、その評価基準を担当教員同士で事前に共有し、学生にも提示することができれば、学生も何をどこまでする必要があるのかを確認できる。

また、事前に評価基準が明確に提示されることにより、担当教員と学生双方が同じ方向性に向けて目標達成に向かい進むことができる。今後、授業改善と共に評価する内容を可視化するためにも、ルーブリック評価は実行可能性の高い評価方法と言えよう。

3-2ルーブリックとは何か

ルーブリックとは、パフォーマンスの質を評価するために用いられる評価基準であり、Stevens & Levi (2015) は、「もっとも単純な言い方をすれば、ルーブリックとは「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」である。ルーブリックは、ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルいついて詳細に説明したもので、様々な課題の評価に使うことができる。例えば、レポート、書評、討論への参加、実験レポート、ポートフォリオ、グループワーク、プレゼンテーション、などである」と述べている（邦訳p.2）。

また、Stevens & Leviは、ルーブリックが必要かどうかを知るために、表2で示した13項目のうち、3項目以上当てはまるようであれば、確実にルーブリックが必要であるとしている。

さらに、ルーブリックを作成し、使用する主な理由として、以下の6項目を挙げて必要性を説いている（邦訳p.22）。

- ① タイミングの良いフィードバック
- ② 学生による詳細なフィードバックの活用
- ③ 批評的思考力のトレーニング
- ④ 他者とのコミュニケーションの活性化
- ⑤ 教員の教育技法の向上
- ⑥ 平等な学習環境づくり

表2 ルーブリック作成の目安（3項目以上）

1	ほぼ全員の学生の答案用紙に同じコメントを書くので、腱鞘炎になりかけている。
2	ただいま、午前3時。机の上の答案用紙の山は今にも天井に届きそうである。採点締め切り日を4週間も遅れてしまっているが、今晚も確実に終わりそうにない。
3	かなり苦勞して付けたコメントの字が読めないと、学生に不満を言われることがよくある。
4	すべての答案を採点してから、最後の答案の採点の仕方がはじめの答案のものと微妙に異なっているような気がして不安になる。
5	学生には、学期中のすべての課題を統合して問うような複雑な課題をこなして欲しいが、簡潔かつ明確に教員側の様々な期待を伝える方法がわからない。
6	学生には解決策の見えない課題について熟考する能力を伸ばしてもらいたい、そのことを明確に伝える方法がわからない。
7	周到に考えて作った課題を、学生に今回初めて課そうとしたが、それを説明するのに1コマ全部かかってしまった。
8	シラバスに詳しい説明を書いているにもかかわらず、1クラスにつき、必ず2、3回はどんな課題をしなければならないのかという質問が出る。
9	文章作成を支援するライティング・センターや学習支援窓口の担当者と電話で長々と話さなければならぬ。なぜなら、そこに相談にいった自分の授業を受けている学生が、課題や期待されていることについてははっきり説明できないからだ。
10	同僚教員と協同して授業で共通の課題を使っているが、自分の採点基準が同僚教員のものと違っていたらどうしようかと気になっている。
11	提出された課題にがっかりすることがよくある。というのも学生全員もしくはほとんどが、わざわざいう必要もない、学問的にはあまりにも基本的な事柄（例えば引用の仕方やページの表記忘れなど）を知らないことが判明するからである。
12	複雑な学期末の課題を一生懸命説明しているのに、学生は教員のことを不可解な課題で自分たちを陥れようとする敵とみなしていると感じる。
13	ひょっとすると学生の言っていることの方が正しいのではないかと思い始めている。

出所：Stevens & Levi (2013) 邦訳pp.3-4

3-3 ルーブリックの種類

ルーブリックは、具体的に次の3種類の評価方法で作成することが可能である。①教員が作成して授業評価に活用するためのルーブリック、②学生と共に作成をするルーブリック、③教員同士で協働して作成するルーブリックである。

ルーブリックを作成するうえでは、モデレーション（moderation）をすることが大切な作業となる。その理由としては、「比較可能性を高める」という意味があり、評価の過程を統一することで、評価の結果も統一することに繋がるからである。

ルーブリックを作成するためのモデレーションとは、なるべく多数のパフォーマンスを収集し、「評価観点」と「評価尺度」両方について調整をすることである。この調整は、評価者が複数で授業を行う場合には、特に時間をかけて全員の評価にブレがないようにすることが大切な作業となる。

例えば、作品等の形あるものについてルーブリック評価をする場合は、まず、全作品について、評価者一人ひとりがお互いの採点内容がわからないように採点をする。次に、その採点を評価者全員が持ち寄る。同じ採点が付いた作品には、共通してみられる特徴を記述し、次にその記述語を作成するという段階に入る。

評価に対する意見がわかれた作品については、必ず評価者同士で再評価を行う必要があり、最終的に記述語を完成させるまで何度か調整のための時間を要することになる。しかし、作品という形あるもののルーブリック評価については、一度作成した評価内容は、それを基準に複数回その評価方法が使用できるという利点があり、評価作成の段階で評価尺度のモデレーションを特に注意深くすることでその後の評価に時間がかからないという利点がある。

次に、レポートのルーブリック評価の場合は、そのレポートを回収し、複数の担当者が評価をする場合は、評価担当者が一同に会して協議する必要がある。最初に行うのは、評価尺度を決めることである。また、モデレーションをすることも必要で、それらの手順を踏んでではじめて、ルーブリック評価が適切な評価として機能をする。

ルーブリックで行う評価のメリットは、①学生に対して評価の目安がわかりやすい(評価基準)、②学生が結果(成績)だけで自身の力を判断することなく、行った行為やそのプロセスも把握できるため今後の各自の学びに活かせる、③教員にとっては、それぞれの学生の強みや弱みを評価基準に照らして把握する手立てになる、などである。

完成されたルーブリック評価を使用する段階になると、たとえ異なる担当者による評価であったとしても、評価内容が「ぶれにくい」というメリットがある。

ルーブリックを作成する準備段階では、作成に時間はかかるのだが、一度作成をすれば、使用する段階で、①採点時間を節約することができる、②学生に詳細なフィードバックが可能になる、などメリットは大きい。また、学生はルーブリック評価を提示されることで、シラパスの内容や達成目標について理解をする度合いが高くなり、教員にとっても説得力を持って指導をする材料として活用できる。

松下(2012)によると、ルーブリックはいくつかのタイプ(表3)に分けられており、どのタイプのルーブリックを使うかによって、パフォーマンス評価の性格を大きく左右するとされている。

表3 ルーブリックのタイプ

構 造	<ul style="list-style-type: none"> ・基準を複数設定して分析的に評価する「分析的ルーブリック (analytic rubric)」 ・基準を複数に分けずに全体的に評価する「全体的ルーブリック (holistic rubric)」
スコープ	<ul style="list-style-type: none"> ・ある領域で一般的に適用できる「一般的ルーブリック (generic rubric)」 ・当該課題だけに適用される「課題特殊的ルーブリック (task-specific rubric)」
スパン	<ul style="list-style-type: none"> ・複数年にまたがって使われる「長期的ルーブリック (longitudinal rubric)」 ・短期間あるいはスナップショット的に使われる採点用ルーブリック

出所：松下(2012) p.83をもとに著者作成

3-4 ルーブリックを使用する目的

これまで成績評価は、各担当教員が独自の評価基準を定め、それに沿って採点をし、その結果を成績評価としている。評価基準についても同様で、各担当教員に任されており、特にレポー

トや作品等の評価基準については、担当該当年の学生の状況やクラスの人数により、曖昧な評価になる可能性も出てくる。

例えば、次のように感じて評価をしている場合である。①思ったより、今年度の学生は全体の成績が低い、②このままでは、不可の人数があまりにも多い、③全体の状況を考えて評価をするなど、履修した学生の状況が年度によってばらつきが出る、などの場合である。各担当教員が責任をもって行っている評価であり、これまでと教え方や教材に差異がなかったとしても、履修した学生の状況により、教員が自分なりに定めていた評価基準に若干の曖昧さが成績に反映される可能性もある。

これまでのこのような曖昧さが否めない成績評価に対して、近年高等教育機関においては、「厳格なる成績評価」とともに学生に対して「可視化」が求められている。さらに、学生からの評価に対する異議申し立てへの対応や学生自身による受講前からの目標設定を含め、学生が主体的な態度で受講をすることを促す体制を整えるための方策が求められている。

ルーブリックは、教員の評価基準として使用するだけでなく、作成した内容を事前に公開することで、学生対応への問題解決の一つの手立てとして有効な方法となる可能性が高い。

学生はシラバスを確認することで、到達目標と共に毎回の授業内容について把握することができるが、その評価方法についてまで、受講前に知る機会はこれまでにほとんどない。担当教員がどのような採点基準によりその授業を評価するのか確認することは難しい。しかし、ルーブリックを使用し公開することで、学生が評価基準の詳細を確認でき、到達目標をより詳細に理解できれば、学生自身による授業の事前準備や授業中における積極的な関わり方も可能となる。もちろん学生の評価は、ルーブリックという単一の評価方法だけでは完全な評価ができないが、教員がどのような評価方法で担当している教科の特性（講義・演習・実技・実演・発表・実験等）を生かして、ルーブリックを使用した一つの評価方法として活用するのが大切となる。

ルーブリックのメリットは、学生に「自分の点数がどのように算出されたのか」をはっきりと示すことができることであり、試験結果や成績評価だけを確認して、異議申し立てをすることも減る結果となる。なにより、たとえ不可の学生が多く出たとしても「なぜこのような結果を招いたか」について、教員は学生にきちんと説明をすることができ、学生も何を学ぶ必要があったのか、また何が学びの中で足りなかったかを知ることができるようになるという点である。

3-5 ルーブリックの作成の基本的な流れ

ルーブリックは、評価観点（評価基準、求める具体的なスキルや知識）と、それについての数値的な評価尺度（達成レベル）で項目を作成し、その尺度の中身（認識や行為の特徴）を説明する評価基準の記述語からなる表である。

「評価観点」は、1項目以上で最大で6～7項目が良いとされており、「評価尺度」は、1項目以上で、最適は3項目であり最大で5項目が良いとされている。

ルーブリックを作成するための基本的な流れには4段階の手順があり、その手順に従って作

成すると作成しやすい (Stevens & Levi, 2013, 邦訳pp.23-26)。

実際のルーブリック作成の流れは以下の通りである。

第1段階では、担当の授業や課題を「振り返り」、目的や成果を確認し、その授業ではどのような到達目標かを確認する。ルーブリックでは、日頃教員が、授業全体の目標や過去の授業経験の中で問題となる課題を振り返り、そこから出てくる気づきや課題を書き留めるところからスタートする。

第2段階では、学習目標の「リストの作成」と各目標の「期待される高水準」の行動を記述する。リストの作成には、付箋を用いると効率が良い。その付箋用紙には1枚につき1つの行動内容を記述し（これが評価基準となる）、それを約20枚用意する。

第3段階では、第2段階で作成したリスト1枚1枚を注意深く読み込み、関連しているものをグループ分けしていく。最高水準の行動を類似するスキルごとに「グループ化」し、そこに共通する評価観点に「見出し付け」を行う。付箋で書き出した内容は、KJ法を使って整理すると「見出し付け」の作成が容易になる。「評価観点」を見つけ出すことで、類似する行動ごとにグループ化が可能になる。

第4段階では、不足する行動の記述（評価基準）を補いながら、「表の作成」を行う。

見出しは、ルーブリックの「評価観点」として使用することになり、表の左側一列目に配置する。さらに「評価尺度」に対応した「評価基準」を付箋の中から選択し、それぞれの表のセルの中に入れていく。

「評価尺度」に対応した、「評価基準」は、条件型、数量詞型、動詞型、形容詞・副詞型などで記述する。さらに「評価尺度」に対応した「評価基準」の設定をすることが大切で、「評価尺度」の違いが分かるように注意深く作成をしていく。

第1段階から第4段階までの流れでルーブリックの表を作成するための「評価観点」「評価尺度」「評価基準」の配置は、表4のとおりである。

表4 基本的なルーブリックの表

	評価尺度1	評価尺度2	評価尺度3
評価観点1	評価基準1－1	評価基準1－2	評価基準1－3
評価観点2	評価基準2－1	評価基準2－2	評価基準2－3
評価観点3	評価基準3－1	評価基準3－2	評価基準3－3
評価観点4	評価基準4－1	評価基準3－2	評価基準4－3

出所：Stevens & Levi (2013) 邦訳 p.4

以上の4段階で作成するルーブリックについて、Stevens & Levi (2013) は、「4段階で進めるルーブリックの作成は、特に新しいスキルや手続きを必要としない。振り返り、リストの作成、グループ化と見出し付け、表の作成という順で、私たちが教員となる過程で身につけてきたスキルと能力が使われている方法を体系化したに過ぎない。こうしたスキルが、採点手段であるルーブリックを作る際の手助けになるし、ルーブリックは、教員、学生の両方にメリット

がある」と述べている（邦訳p.36）。

さらに、ループリックは作成に時間がかかるが、一度作成すればその後の採点では時間の節約になり、より多くのフィードバックを恒常的に提供できる手助けになるとも述べている。

すでにループリックはこれまで多くの作成事例が公表されており、インターネットでも入手可能である。しかし、他人が作成したループリックは参考にはなるが、自分で使用するものについては、自分用にカスタマイズし、使用する必要がある。各担当科目の中で、教員がその科目における課題をどのように評価するのかについて、学生に対して正確かつ公正な成績評価を示すためには、時間をかけて作成をする必要があることは否めない。

表5は、ループリックの「評価尺度」の例である。どのような授業科目で使用するかによって、評価尺度の項目の表現は異なる。ここでは、4例ほど項目事例を作成した。「評価尺度」は、最適3項目で最大5項目が良いとされていることから、3項目で作成した事例である。

表5 ループリック表の評価尺度の例（横軸）各3項目で作成

例1	優秀	良	要再学習
例2	模範的	有能	発展途上
例3	完成度が高い	完成度は普通	完成度が低い
例4	プロ級	合格	不合格

出所：筆者作成

次に表6は、表5の例1「評価尺度」3項目を使用し「プレゼンテーション」の評価を想定して、作成した「評価観点」（1列目）の例である。

表6 ループリック表の尺度観点の例（縦軸）

	優 秀	良	要再学習
内 容			
構 成			
ソフトの使用方法			
話し方			
聴衆へのアピール度			

出所：筆者作成

表6の空白セルの部分には、各評価尺度（横軸）にあった「評価基準」の内容を文章で記述していく。尺度に対応した評価を設定し、「条件型、数量詞型、動詞型、形容詞・副詞型」などの方法で、尺度の違いをどのように評価するかを用紙に検討し書いていく。その「評価基準」の作成には、作成方法の第2段階の方法である付箋を活用して記入し、それぞれの評価に適した行動内容を各空欄のセルの中に当てはめていく。最終の第4段階では、不足する行動の記述を補うことにより全体像が見えてくる。

ループリックは、どのような科目・授業内容（演習・実技・講義・演技・実験・実習等）で

使用するかによって、作成する表の中、特に「評価基準」については、すべて一からその授業科目に合わせて作成することになる。

作成した「評価基準」の内容については、何度か改良を重ねて使用することができるため、より学生の状況にあった形での評価が可能となる。

3-6 ルーブリック作成の注意点

ルーブリックの作成において、特に気をつける点としては、「妥当性」と「信頼性」のある評価となるデータにすることである。この2項目を高めるために、「評価基準」を注意深く作成する必要があり、ルーブリックを使用する際「妥当性」と「信頼性」がないものは、実行可能性が低くなるといわれている。そのため、①教員が作成して、授業評価に活用するためのルーブリック、②学生と共に作成するルーブリック、③教員と共同で作成するルーブリック、それぞれによって作成方法は異なってくる。

例えば、複数の担当教員により、同一授業でルーブリックを使用する目的で作成する場合には、各自の「評価基準」を持ち寄って検討を重ねて作成する必要があり、単独で作成する場合に比べ、さらに作成に時間を要するうえ担当教員間での協力が欠かせない。

「評価基準」の設定では、漏れのないようにすることはもちろん、内容がだぶらないようにすることが大切で、さらに、一つの項目の中に複数の内容を含ませないように注意して作成することも重要なことである。

次に、「評価尺度」の設定では、評価の結果にばらつきが出るように作成する必要がある。その理由としては、あいまいな表現により厳格な評価ができない可能性が出てくることもあるからである。評価をしようとしたが、結果として評価が難しい場合は、中央値を基準に評価をすることが必要であるといわれている。

最初からルーブリックの作成が困難な場合は、ルーブリックを簡素化したものとして、チェックシートを使用するところから始めることも一つの方法である。ルーブリックは、そのチェックシートを応用したものとして最終的に作成し、授業評価を行う方法として使用できるように工夫を重ねることが大切である。

シンプルなルーブリックとして、小学校理科の実験データを基に結論を導くという課題で測定し、採点基準0点から3点までの生徒のパフォーマンスを表にした非常にわかりやすい評価として表7の例を紹介しておく。

表7 結論を導く理科のルーブリック作成例

点数	特 徴
0	結論に達していない。
1	結論は導けているが、データに基づいていない。
2	データに基づいて結論が導けている。しかし結論を導いた根拠を全く示せていない。
3	データに基づいて結論を導き、結論を導いた根拠を示している。

出所：Hart（2012）邦訳p.93

ルーブリックのメリットとして、Hart（2012）は、「ルーブリックは具体的で観察可能なパフォーマンスの特徴で書かれているので、不正解な採点が行われる可能性が減ることになり、さらに、生徒自身が自分の到達度はどの程度で、どのようにして自分のパフォーマンスを向上させていけるのかということを評価する助けになる」と述べている（邦訳p.93）。

4. おわりに

本稿では、授業において学生の能動的学びを喚起し、その結果として評価するための新しい評価方法、特にルーブリック評価を検討し、その作成方法を整理することで、今後の授業運営に必要な課題を考察することができた。

筆者は、担当してきた授業科目において、単に目標達成のためだけの授業運営と授業評価にならないためにどのような評価方法が必要か、また近年求められている評価について確認することを課題としていた。さらに授業中における学生と教員の関係性も重要視しながら授業運営を行うためにも、新しい評価について一から考察することが必要であった。

すでに担当をしている情報基礎教育科目やプレゼンテーションの授業では、ルーブリックを使用した評価方法を導入し、試行している段階である。しかしながら、今後は作成した評価基準、評価方法の内容を精査しながら、これまでの結果データを収集、検討を重ね、学生がより主体的に取り組む姿勢を育むことに寄与できるような授業内容にするため改善を重ねている段階である。

学習評価を行ううえでは、ルーブリックは客観的で信頼性があり、公正に評価される評価方法として大変有効である。大学によっては、すでにシラバス作成時にルーブリック評価の欄を設け、シラバスと共に公開をしているところもある。学生は、その評価基準を確認することで、授業の達成目標が一目でわかり、授業を受講する前からその授業に向けての準備を行うことが可能となる。評価をする側が新しい学習評価の目的と評価基準、評価方法を確認することで、今後の方向性をより具体的にすることができる。

筆者は、今後学生を評価するにあたり、学生が「次の授業が待ち遠しい」「次の授業では、どのような成長をしていこうか」、あるいは「授業に出席するのが楽しみだ」という気持ちで授業を受けて欲しいと願っている。今後授業を行ううえでの課題は、ルーブリック評価の実践と改善であり、さらにその結果の蓄積をもとに、継続的な検討をすることである。そのうえで、ルーブリック評価を使用することにより、どのように学生の主体性が身につく、学生一人ひとりにより影響を与えたかについて、分析・検討することも重要であると考えている。

ルーブリックを使用した具体的な評価と学生への影響についての詳細報告と分析については、次の機会に論じることとする。

引用・参考文献一覧

梶田毅一（2010）『教育評価 〔第2版補訂2版〕』有斐閣双書

河合塾編著（2011）『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか 経済系・工学系の全国大学調査

- からみえてきたこと』東信堂
- 杉谷 祐美子 「今求められている学修評価に関する基礎知識」2014年度河合塾FDセミナー京都参加資料
2 2015.03.15
- 初年次教育学会編 (2014)『初年次教育の現状と未来』世界思想社
- 大学教育学会30周年記念誌編集委員会 (2010)『大学教育研究と改革の30年－大学教育学会の視点から－』
東信堂
- 大学審議会 (1997)「高等教育の一層の改善について (答申)」
- 田中耕治 (2008)『教育評価』岩波書店
- 中央教育審議会 (1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (答申)」
- 中央教育審議会 (2008)「学士課程教育の構築に向けて (答申)」
- 中央教育審議会 (2012)「新たな未来を気づくための大学教育の質的転換にむけて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」
- 土持ゲーリー法一 (2014)「L. ディー・フィンク博士との対談を中心に－ファカルティ・ディベロップメントに関して日本の大学へ提言－」『高等教育開発センターフォーラム』Vol.1 pp.83-90
- 友野雄一郎 (2013)「大学のアクティブラーニング、現状と課題」『リクルートカレッジマネジメント』
180/May・Jun. pp.18-21
- 中井俊樹 (2016)「シリーズ大学の教授法3」『アクティブラーニング』玉川大学出版部
- 中山留美子 (2013)「アクティブ・ラーナーを育てる能動的学修推進におけるPBL教育の意義と導入の工夫」
『21世紀教育フォーラム』第8号 pp.13-21
- 日本私立大学連盟編 (1999)『大学の教育・授業の変革と創造 教育から学習へ』東海大学出版会
- 樋口美雄 財務省財務総合政策研究所編著 (2012)『グローバル社会の人材育成・活用 就学から就業への移行課題』勁草書房
- 松下佳代 (2012)「パフォーマンス評価による学習の質の評価」『京都大学高等教育研究』第18号 pp.75-97
- 松下佳代編著 (2015)『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を進化させるために』勁草書房
- 文部科学省著 (2014)『大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック 大学における特色ある教育事例の把握等に関する調査研究』リベリタス・クレオ
- 山田剛史 (2013a)「連載：学びと成長を促すアセスメントデザイン (第1回：具体的な学習成果を設定し教職員・学生と共有しよう)」『Between』4-5月号 pp.32-34
- 山田剛史 (2013b)「連載：学びと成長を促すアセスメントデザイン (第3回：認知的側面に偏らない評価指標設定に知恵を絞ろう)」『Between』8-9月号 pp.32-34
- 山田礼子 (2013)『学士課程教育の質保証にむけて 学生調査と初年次教育からみえてきたもの』東信堂
- Gipps C. V. (1994) *Beyond Testing: Towards a theory of educational assessment*. London: Falmer Press. 鈴木秀幸
訳『新しい評価を求めて テスト教育の終焉』論創社 2001年
- Hart, D. (1994). *Authentic Assessment: A Handbook for Educators*. Person Education, Inc. 田中耕治監訳『パフォーマンス評価入門 - 「真正の評価」論からの提案-』ミネルヴァ書房 2012年
- Stevens D. D. & Levi A. L. (2013) *INTRODUCTION TO RUBRICS, Second Edition An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning*, Stylus Publishing, LLC. 佐藤浩章監
訳, 井上敏憲+俣野秀典訳『大学教員のための ルーブリック評価入門』玉川大学出版部 2015年